

曇天日数は年間五六%、霧日数は八三%で、降水量は町の平地と比べて多く、平成元年では二倍近くになっている。

降雪日数は年間の一七・五%で雪が全く降らない月は六月から九月までで、この間でも雪が降ることがある。

五月になって雪が解け、春・夏は短く、八月がくると秋風が吹く。天候は急速に変化することが多く、登山者を苦しめることがあるので、万全の注意が必要である。

二 自然災害

1 台 風

本町における自然災害の中で、最も頻発して被害の多いのは台風である。

台風の発生地点は季節的な変化をなし、多くの場合北緯五度から二〇度の地域であり、経度では東経一二〇度から一八〇度の地域で発生している。緯度の低い東の方で発生

した台風は強い。

もともと台風は気圧の一種であり、中心示度の低い台風ほど強い暴風雨をともなっている。この風は進行方向の右側が強く、これに比べて左側の方が弱い。本県の場合は瀬戸内海を通過した場合に被害が大きい。しかし、九月ごろに来る台風は高知沖を通過して紀伊水道にぬける場合が多く、その場合は瀬戸内海が台風の左側になるのと四国山脈が暴風雨を防いでくれるという地勢の関係で、大きな被害を免れる場合が少なくない。

昭和九年から約三〇年間に日本列島を襲った主な台風は次のとおりであるが、その八割が九月に来襲しておりまたその六割が四国に被害を与えている。

室戸台風	昭和九年(一九三四)	九月
枕崎台風	昭和二〇年(一九四五)	九月
カスリン台風	昭和二二年(一九四七)	九月
ジェーン台風	昭和二五年(一九五〇)	九月
ルース台風	昭和二六年(一九五二)	一〇月
ダイナ台風	昭和二七年(一九五三)	六月
洞爺丸台風	昭和二九年(一九五四)	九月

狩野川台風	昭和三三年(一九五八)	九月
伊勢湾台風	昭和三四年(一九五九)	九月
第二室戸台風	昭和三六年(一九六一)	九月

2 被害の大きかった台風

(一) ジェーン台風とキジア台風

昭和二五年(一九五〇)は、一月三日・三十一日に時ならぬ暴風雨の襲来にあったが、七月二〇日にグレイスタ台風・同二七日にヘリン台風、八月一日にアイダ台風と続き、九月に入ってジェーン台風とキジア台風が相ついで来襲した。

八月三十一日硫黄島西方三五キロメートルの海上より北西に進んできたジェーン台風は、九月一日硫黄島と南大東島の中間に達し、ここより北に進路をかえ、三日六時に室戸岬南々西八〇キロメートルの海上に達した。その後北東に進んで四国東岸・淡路島・神戸を経て若狭湾より能登半島へと向かった。このため四国東部は大風水害をうけ、周桑郡でも二〇〇ミリの豪雨となった。

ジェーン台風のすぐ後、九月四日グアム島の北西海上に発生した低気圧は発達しながら北上し、七日には北緯一七度、東経一四三度地点に進み、本州南方海上を北西進し続け、一三日の午後九州に上陸した。一三日夜半には九州を横断して中国地方西端をかすめ日本海を北東進して北海道に向かったが、勢力が強く九州・四国・中国地方に大きな被害が出た。

愛媛県では一二日、一三日に暴風雨となり、県下全体に二〇〇ミリ以上の雨量で、海上では風速三〇メートル以上となり、死傷者一九名を出している。ジェーン台風・キジア台風とも、稲の開花期に来襲し、フェーン現象がおこって水稲の被害は甚大であった。

昭和二五年九月二六日の石根村議会は、「台風災害に依る耕作田流失」のため、村税免除一件を議決している。

また同年十月十日の小松町議会は追加予算で、消防費出場手当一五〇人分の追加六〇〇〇円、水防費人夫賃一人一八〇円で四〇〇〇円の追加をし、災害土木費二万五〇〇〇円、道路橋梁費九万六〇〇〇円、河川費二万円をそれぞれ追加している。

第3章 気候、自然災害

(二) ケイト台風とルース台風

昭和二六年は、七月二日にケイト台風が来襲し、その後梅雨明け前の豪雨が四日間続いて、その直後から約一か月の日照りが続き旱害となったが、一〇月一四日に大型のルース台風に見舞われた。

ルース台風は一〇月八日グアム島南方で発生し、次第に北西から西西北西に進み、一二日午後には北緯二〇度線に達

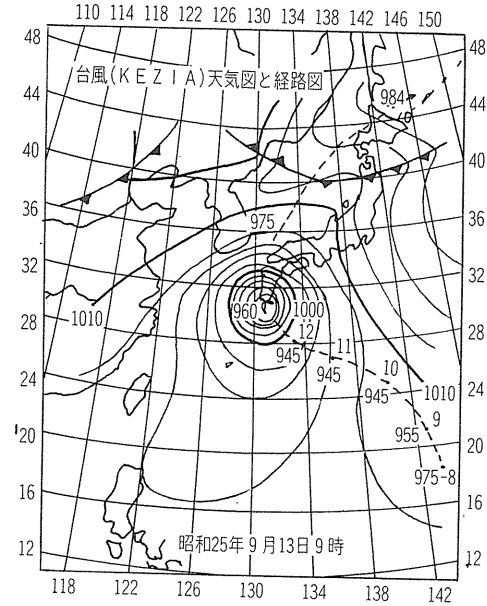


図18 キジア台風 (昭和25年9月13日)

して進路を北々東にかえ、一四日六時には沖縄の北西を通り過した。

こうして一四日の一九時には鹿児島島の西岸に上陸し、九州を北東に横断して周防灘から防府市に再上陸して山陰に出た。中心気圧九二五ミリバールと強烈な台風であったため、東予の山岳部で四〇〇ミリを超す豪雨があり、河川が氾濫した。県下の被害は、死者三二名、負傷者四一五名、行方不明一二名で、建物の全、半壊・流失や田畑、道路、橋梁、堤防の被害は甚大であった。

同年一〇月二九日の千足山村議会の報告によると、

家屋損害額	一、七七八、〇〇〇円
農作物被害	五六五、〇〇〇円
村道・林道被害	四二八、〇〇〇円
村産物被害	一、四三二、〇〇〇円
合計	四、二〇三、〇〇〇円

となっており、次の議案が提出されている。

二、議案第三〇号 ルース台風災害復旧費資金借入の件
ルース台風災害復旧(戸石分校)のため、金六拾七万円を四国財務局松山財務部より借入する。

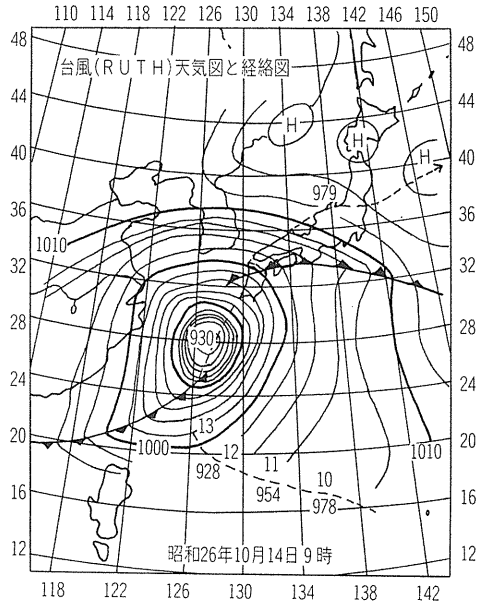


図19 ルース台風 (昭和26年10月14日)



ルース台風による被害 石鎚村戸石分校

なお石根村議会も一〇月一五日の議会でケイト台風災害復旧費資金借入の件で、一金八〇万円の借入れ決議をおこなっている。

(三) 一七号台風

昭和五一年(一九七六)の台風一七号は、九月三日にカ

リン諸島で発生して発達しながら西西北西に進行し、一〇日の夕方から一二日までの三日間、鹿児島島の南西に停滞した。

このため、日本列島沿いに停滞していた前線の刺戟により西日本全体に豪雨が断続的に降り、東予地方では大雨の

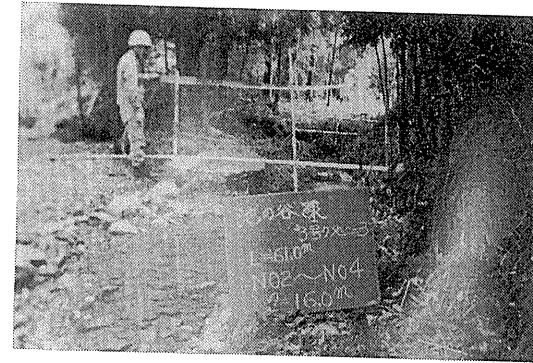
年 号	災 害 の 概 況
明治2年 1869	多雨により米作に大被害。
" 6年 1873	6月30日より7月7日まで暴風雨。 8月30日、10月2日に大風雨あり。
" 7年 1874	8月13日、8月19日、8月21日大風雨あり。
" 16年 1883	大早ばつあり赤痢流行。5月降雹あり。9月10日大風雨。 10月12日大風雨。
" 17年 1884	8月25日暴風雨。9月24日台風。
" 19年 1886	8月20日台風。9月10日台風、河川決壊する。
" 23年 1890	7月1日より4日間連続降雨。9月11日台風。
" 24年 1891	8月16日台風。9月14日台風。
" 26年 1893	6月25日より8月4日まで降雨なし、旱害。 10月14日台風あり、被害甚大。
" 27年 1894	7月26日より8月31日まで降雨微量、旱害。 9月妙口原に赤痢流行、死者50余人を出す。9月11日台風。
" 28年 1895	8月25日台風、中山川決壊する。
" 29年 1896	5月20日台風、東予山間部の雨量 150ミリ。 8月18日台風、西条で 143ミリの雨量。
" 30年 1897	7月22日より8月18日まで炎暑続き早ばつ。 9月29日台風、山岳部の雨量 300ミリ以上。
" 31年 1898	8月29日と9月2日に台風あり、東予の降雨量 250ミリに達す。

被害が続出した。

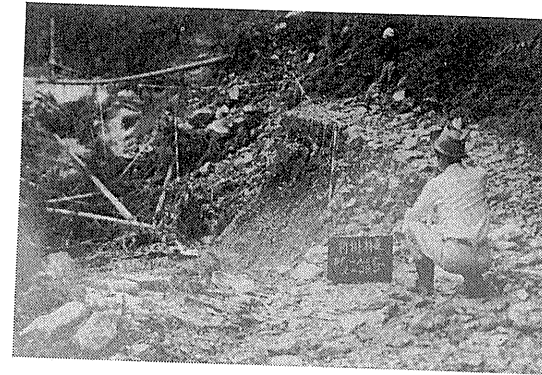
周桑郡一帯は八日から五日間降り続けて、平地でも八〇〇ミリ前後、山間部では一〇〇〇ミリの越す豪雨となり、東予市、周桑郡では未曾有の大被害を蒙った。

昭和五年九月二二日の小松町議会における報告によると、被害は次のようになっている。

河川 三四件 橋梁 二件



17号台風による災害（池ノ谷林道）



17号台風による災害（折掛林道）

3 明治以後の自然災害

次は小松町に被害を与えた自然災害を諸資料によりまとめたものである。（明治以前の災害は歴史編掲載）

林道	農道	町道	農道	農業用水路
二二件	四二件	三二件	六件	二八件
治山	三六件	耕地合計	井堰	農道橋
		二〇三件	二件	五件
		三八三ヘクタール		

大正12年 1923	4月14日霜害あり。6月23日台風。 7月11日～12日豪雨。(9月1日関東大震災)
〃 13年 1924	旱害による被害あり。9月11日～12日台風。 10月8日台風、山間部の雨量 150ミリ。
〃 15年 1926	7月3日～6日連続豪雨で被害甚大。 7月8日より8月まで降雨なく早ばつ。10月30日降雹。
昭和2年 1927	5月8日霜害あり。8月26日豪雨、石鎚山系の雨量 300ミリ、加茂川、国領川等が氾濫する。
〃 3年 1928	4月22日山岳部で降雹。4月24日霜害。6月25日～28日集中豪雨。 8月18日台風。8月29日～30日台風、東予の雨量 200ミリ。
〃 4年 1929	4月23日霜害。7月10日～9月19日早ばつ。
〃 6年 1931	5月28日、6月29日降雹、麦、梨、柑きつ、桑、煙草など県下の被害甚大。10月13日台風。
〃 7年 1932	7月2日豪雨、東予の雨量 200ミリ。8月11日～12日台風。 11月7日降雹。
〃 8年 1933	4月25日大雨。6月14日降雹。10月24日台風。
〃 9年 1934	2月8日降雹。7月27日～8月30日大旱魃。9月21日室戸台風、稲の被害甚大、瀬戸内海の風速30m/S、県下で家屋全壊 156、流失71。
〃 10年 1935	6月3日強風。6月26日より霖雨。8月28日台風。 9月25日台風、山岳部の雨量 400ミリ。
〃 12年 1937	2月27日地震(安芸灘)。9月11日台風、被害甚大。12月1日降雹。
〃 13年 1938	7月3日～5日豪雨。7月31日豪雨、県下の死傷者22人、家屋倒壊・流失87戸、浸水 5,438戸。

明治32年 1899	7月9日台風。8月28日台風、中山川氾濫する。 加茂川氾濫し家屋流失60戸、溺死51人。9月8日台風。9月20日台風。
〃 33年 1900	7月7日～8日連続豪雨。7月14日より20日まで連続降雨、東予で200ミリの雨量。8月24日台風。9月27日台風。
〃 38年 1905	8月15日～17日暴風雨、妙谷川橋流失、中山川決壊し家屋流失、周桑平野1,000町歩が潮水となり、北条新田90戸、300人が避難。
〃 40年 1907	2月11日大雪。4月13日、30日暴風あり。7月18日台風。 9月7日～8日台風、東予地方の奥地で 1,000ミリをこす雨量あり。
〃 42年 1909	地震(安芸灘)。8月6日台風。
〃 44年 1911	6月19日台風、東予地区の雨量 150ミリ。 8月15日～16日台風、山間部の雨量 400ミリ。
大正元年 1912	9月21日～23日台風、平地の雨量300ミリ、山間部の雨量500ミリ、中山川角部土手 1,000メートル決壊。
〃 3年 1914	1月2日暴風。6月3日台風。7月14日～8月21日降雨なく旱害。 8月25日台風。9月14日台風、県下に大被害。
〃 4年 1915	9月8日台風、中山川下流が決壊。10月7日台風。
〃 6年 1917	2月4日大雪。8月3日台風。10月10日台風、東予で雨量 200ミリ。
〃 7年 1918	7月4日豪雨、東予の雨量 150ミリ。12月28日暴風おこる。
〃 9年 1920	4月18日地震(四阪島付近)。4月23日霜害。5月7日暴風雨。 6月27日豪雨。8月9日豪雨。8月15日～17日台風、雨量 588ミリ大被害。
〃 10年 1921	6月14日～17日豪雨。7月13日台風。9月25日台風。 10月29日暴風、降雹あり。

1954	9月13日台風12号。9月26日台風15号、洞爺丸沈没。
昭和30年 1955	6月18日豪雨。9月30日台風22号。 10月3日台風23号、水稲、果樹に大被害。
〃 31年 1956	6月30日～7月3日豪雨。8月17日台風9号。9月10日台風12号、石 鎚山の雨量 800ミリ。9月27日台風。12月5日強風。
〃 32年 1957	6月13日降雹。6月27日台風5号。7月2日豪雨。 8月21日台風7号。9月6日台風10号。
〃 34年 1959	8月8日台風6号洪水あり。9月25日伊勢湾台風(15号)、県下浸水 1,050戸、予讃線川之江―西条間不通、14人生き埋め、2児死亡。
〃 36年 1961	9月16日第二室戸台風、洪水被害多し、県下の土木関係被害10億円。
〃 37年 1962	6月、7月に大雨による被害あり。
〃 38年 1963	2月より4月にかけて全県に赤痢発生。町内の隔離者86名。 5月より6月にかけて長雨が続き、県下農水産物の被害55億円、この うち麦の被害28億円、天災融資法が適用される。
〃 39年 1964	9月25日台風20号本県を縦断、宇和島で瞬間風速72m、史上最高を記 録。
〃 40年 1965	8月6日台風15号、強風吹く。9月24日台風24号。
〃 41年 1966	9月9日台風19号。9月18日台風21号、県下に 100ミリの大雨。
〃 42年 1967	5月27日から6月にかけて降雨なく旱害。7月9日集中豪雨、県下の被 害、死者9人、負傷者9人、家屋全半壊89戸、被災者13,991人、損害 額22億円。7月26日より48日間降雨なく大旱魃となる。10月5日、89 日ぶりで本格的降雨。松山气象台最長記録。県下の農作物被害 130億 円、天災融資法が適用される。(以上愛媛県史概説参考)

昭和14年 1939	7月より8月にかけて早ばつ、農作物の被害甚大。
〃 16年 1941	4月8日霜害。6月25日～29日台風、大被害。 8月14日台風、16日まで降雨あり被害続出。
〃 17年 1942	6月14日豪雨。8月27日台風。 9月21日台風、東予地区の総雨量 400ミリ。
〃 18年 1943	7月21日～24日台風、千足山の雨量 807ミリ。 9月20日台風、風水害による被害多し。
〃 20年 1945	9月17日枕崎台風、東予の平地雨量250ミリ、山間部800ミリ、県下死 者159人、負傷者328人、行方不明23人、住居全壊2,655戸、流失358 戸、半壊5,355戸、床上浸水住家921戸、床下浸水14,015戸、外被害多 数。10月10日阿久根台風、山岳部雨量700ミリ。
〃 21年 1946	7月29日台風、石鎚山気圧 785ミリバール、風速南21.7m/S、降雨 量 400ミリ。12月21日南海大地震。
〃 24年 1949	6月21日デラ台風、県下の死傷475人、行方不明188人、家屋全半壊70 戸、浸水562戸、田畑流失、冠水341町歩、被害15億円。
〃 25年 1950	1月30日～31日暴風雨。7月20日グレイス台風。 7月27日ヘリーン台風。8月13日アイダ台風。 9月3日ジェーン台風。9月13日キジア台風、被害甚大(別記)
〃 26年 1951	7月2日ケイト台風。7月12日～15日豪雨。 7月21日～8月16日早ばつ。10月14日ルース台風、被害甚大(別記)
〃 27年 1952	3月19日、23日強風。6月23日ダイナ台風。7月2日～3日豪雨、東 予沿岸の雨量 432ミリ。7月10日～11日豪雨。7月～8月早ばつ。
〃 28年 1953	6月台風、豪雨あり。8月旱害。9月台風。
〃 29年	1月24日暴風。8月18日台風5号。

～10月19日	17棟、道路・農林水産施設・農作物等に被害発生。	
昭和55年5月21日	台風3号の影響により、農地の崩壊、畦畔の倒壊などの被害が発生。	3,900
〃 〃 7月6日 ～7月10日	梅雨前線による大雨により、道路・河川・その他の農業用施設等に被害が発生した。	61,450
〃 〃 8月26日	豪雨のため畦畔、河川堤防、道路の崩壊が生じた。	12,200
〃 〃 9月10日 ～9月11日	台風13号により、石鎚地区で落石事故があり2人死亡、床下浸水2世帯、道路、畑、農産物等に大きな被害が出た。	70,455
〃 〃 10月14日	台風19号により、河川が増水し、大谷川堤防が被害を受けた。	5,000
昭和56年2月27日 ～3月1日	降雪と異常低温により、ビニールハウス内のイチゴに被害発生。	10,500
昭和57年7月14日	梅雨前線の停滞による大雨のため、農道の崩壊・畦畔の倒壊などの被害が発生。	3,100
〃 〃 8月27日	台風13号の大雨の為、排水路、農道、畦畔等に被害を発生した。	11,850
〃 〃 9月24日 ～9月25日	台風19号により、河川が増水し、大谷川堤防が決壊した、また、床下浸水発生、道路、畦畔等に被害発生。	234,474
昭和58年9月27日 ～9月28日	台風10号により、農道、林道の崩壊、畦畔の倒壊、溜池等に被害が出た。	12,200
昭和59年1月30日 ～1月31日	大雪により、ビニールハウスの破壊、農作物に被害発生。	8,911
昭和60年6月25日	梅雨前線の停滞による大雨により、町道、農道、畦畔、水路等に被害が発生した。	15,800

昭和43年7月28日 9月25日	台風4号により、農業用施設等に被害発生。 第3宮古島台風により、床上浸水15棟、床下浸水37棟、その他の被害を受けた。	(被害額：千円) 2,200 2,943
昭和45年8月21日	台風10号により、住家全壊2棟、半壊9棟一部破損300棟、床下浸水45棟、その他被害が多く発生した。	343,100
昭和46年8月5日 8月30日	台風19号により、床下浸水15棟、公共文教施設、農林水産業施設、公共土木施設、農産物等に被害発生。 台風23号により、農林水産業施設、農産物等に被害発生。	10,646 3,007
昭和47年6月7日 7月24日 9月8日	集中豪雨により、一部道路の崩壊があった。 台風9号により、石鎚地区の桑園が被害。 豪雨により、農道破損。	3,800 760 150
昭和49年7月6日 9月1日 9月8日	豪雨により、小松高校の運動場の一部崩壊、農業用水路に被害発生。 台風16号の風害により、農作物に被害が発生。 台風18号により、山間部の道路が一部崩壊。	4,370 141,008 1,800
昭和51年9月10日 ～9月12日	台風17号により、3日3晩未曾有の大洪水に襲われ、住宅半壊1棟、一部破損9棟、床下浸水250世帯、その他町内に甚大な被害発生。	1,173,408
昭和54年6月27日 ～6月30日 〃 〃 9月30日 〃 〃 10月18日	梅雨前線の停滞による大雨により、河川・農林水産施設等に被害が発生した。 台風16号により、道路、農林水産施設、農作物に被害発生。 台風20号により、住家の一部破損1棟、床下浸水	122,300 30,480 90,358

昭和62年 7月18日	梅雨前線による集中豪雨により、道路、溜池等に被害を受ける。	72,400
〃 〃 8月31日	台風12号により、農産物に被害を受ける。	943
〃 〃 10月16日 ～10月17日	台風19号により、妙谷川越水、3世帯に避難命令が発せられ、床上床下浸水が発生、農林水産施設、公共土木施設、その他の公共施設、農作物に被害発生。	718,825
平成元年 8月27日	台風17号により農作物、農林水産施設、町道等に被害発生。	125,860
〃 〃 9月19日	台風22号により林道被害。	1,500
平成2年 8月21日 ～8月22日	台風14号により、田の流失1件、頭首工被害1件、その他農産物に被害発生。	36,831
平成2年 9月18日 ～9月20日	台風19号により、田畑の流失、道路、農林水産施設、公共土木施設、農産物等に被害発生。	137,899

(小松町役場資料より)

8 災害と疫禍

科学や技術の発達した今日でも、自然の災害は多い。まして、それが発達していなかった江戸時代の庶民は、地震、風水害、旱魃、火災、疫病などの猛威にさらされて生活を破壊される場合も少なくなかった。表65の災害だけでもその多さには驚くばかりである。

これらの内、当地方に関係があり、資料の残っているものに限って概要を述べてみたい。

(一) 地 震

(1) 文禄五年(慶長元年)の大地震

この年は、岩木山や浅間山の噴火があり、諸国に霖雨が続き洪水があり、その上に大地震の発生で災害の多い年であった。

大地震はM_{7.0}で、京畿、四国、九州が被害甚大であ

表65 郷土の近世災害 年表

▲地震 (M=マグニチュード) □風水害
△干魃 ×飢饉 ●火災 ☒疫病

年 代	事 項	年 代	事 項
1586	天正14 ▲ 畿内大地震 (M7.9)	1781	天明1 ● 小松西町50軒焼失
1596	文禄5 ▲ 大地震 (M7.0) 当地に被害甚大	1783	// 3 □ 大洪水
	(慶長1)	1784	// 4 × 連年の不作から大飢饉
1616	元和2 □ 大洪水、中山川筋大破、家・人漂流	1785	// 5 △ 旱魃、大風
1626	寛永3 △ 大旱魃、草木、川魚枯死	1787	// 7 □ 大洪水、連年の凶荒で米価高騰 (金1両で米1斗8升を得る)
1627	// 4 □ 大洪水、害虫発生、凶作		
1635	// 12 ● 三嶋神社火災	1788	// 8 × 大飢饉、各地に騒動発生
1642	// 19 × 関西一帯凶作、餓死者あり	1791	寛政3 ● 小松西町家21、納屋11焼失
1647	正保4 ● 壬生川大火60%焼失	1792	// 4 □ 洪水、中山川下流決壊、広江今在家浸水
1649	慶安2 ▲ 大地震 (M6.6)	1798	// 10 △ 旱魃
1663	寛文3 □ 暴風雨、人畜田畑被害大	1801	享和1 □ 大洪水、中山川堤新田堤痛む
1666	// 6 □ 東予大洪水 △中東予大旱魃	1803	// 3 ● 壬生川大火109軒焼失
1675	延宝3 □ 洪水、連年の凶作で乞食多し	1804	文化1 □ △旱害 洪水2回
1676	// 4 □ 四国大洪水 ×松山藩飢饉	1809	// 6 □ △旱害 洪水
1678	// 6 □ △干魃 □洪水で堤防破損278間、家屋破損277戸	1812	// 9 ▲ 地震 (M6.8)
		1820	文政3 □ 洪水 (減収)
1686	貞享3 □ 丑寅の洪水、長野村移転	1823	// 6 △ 西日本大旱魃 □洪水
1694	元禄7 ● 別子銅山大火、死者多数	1826	// 9 □ 暴風雨、洪水2回
1702	// 15 △ 旱魃 □大暴風 ×全国飢饉	1832	天保3 × 米価高く、飢人多し
1707	宝永4 □ 富士山噴火、長雨暴風	1833	// 4 □ 洪水
	▲ (10/4)大地震 (M8.4) 新田堤大被害	1836	// 7 × 多雨で減収、全国的飢饉
1715	正徳5 □ 多雨、暴風雨五穀実らず	1837	// 8 △ 旱害、□水害、米価高騰 (190文)
1721	享保6 □ 2回の洪水、不作	1839	// 10 ☒ 赤痢大流行、死者多数
1729	// 14 □ 2回の洪水、病虫害、凶作	1846	弘化3 □ 暴風雨、大洪水
1732	// 17 × 享保の大飢饉 (7月多雨、うんか稲の収穫皆無)	1847	// 4 □ 大暴風雨
		1850	嘉永3 □ 洪水
1733	// 18 × 米価高騰・飢饉者続出	1852	// 5 △ 旱魃で植付け遅れる
1741	寛保1 × 凶作	1854	安政 ▲ 寛年の大地震 (M6.4) 新田堤防被害
1743	// 3 □ 東予地方大洪水、加茂川は人畜家屋の漂着山の如く惨状を呈す	1855	// 2 ▲ 地震
1748	寛延1 □ 洪水2回、堤防の決壊多数	1857	// 4 ▲ 地震 (M6.4) □洪水
1758	宝暦8 ● 丹原町家21軒と馬屋等100軒焼失	1859	// 6 ☒ コレラ流行、死者多し
1764	明和1 ● 横峰寺焼ける	1866	慶応2 × 暴風雨、大洪水、飢饉
1765	// 2 ● 壬生川大火 (60軒焼失)		
1770	// 7 △ 大旱魃		
1780	安永9 ● 大頭村大火(家29、納屋・馬屋20焼失)		

第5章 小松藩一柳氏の統治

この二つの記録から、慶長の大地震は、広江、北条などの海岸地帯で地が裂けたり、地盤沈下の被害が大きく、低湿地になったので、集落や神社が、より高燥な内陸へ後退

った。歌舞伎の「地震加藤」でも有名な伏見城では、五七三人が死亡し、堺の町でも六〇〇人、豊後の大分地方では、津波と地盤沈下で瓜生島と久光島が海底に沈み、瓜生島でも七〇八人が死亡したと伝えられている。

当領内でも、広江村の『密林山徳蔵寺由来記』の中に「慶長元年丙申七月上旬大地震動、村宅湮没、寺社亦不_レ免_二故_一目_三、庶民遷居_ニ構_ニ今_一之_一村」とあって、「元広江」というホノギの場所にもともと集落があった広江村は、地盤沈下のために西南にある高燥な現在地に集団移住をしたことを伝えている。

また『多賀村郷土誌』には、鶴岡八幡宮は、元は現在の北条部落と新田部落の中間にあったが、「文禄五年(慶長元年)閏七月九日戌刻、震災のために神殿、宝蔵、神器を始め、記録に至るまで大半顛倒して地中に陥没す」ということで、現在地に遷座して社殿を復旧したことを記している。

この年の五月二〇日と六月一五日に近畿地方を中心に大地震があり、一月五日に「寅歳の大地震」と呼ばれた大地震が発生した。この地震は、四日にやや強い地震がおき、翌五日は、伊予にとって未曾有の大地震に襲われた。嘉永七年二月二七日に安政と改元されたが、余震は安政

したことを教えてくれる。

(2) 宝永四年(一七〇七)の大地震

この年、富士山が噴火して宝永山ができた。一〇月四日、東海道、畿内、南海道にM八・四の大地震と津波があって、潰家二万九〇〇〇戸、死者四九〇〇〇人の被害があった。

当領内の家や人畜の被害は不明であるが、下三村にあつた干拓新田は、地盤沈下と堤防の傷みで大きな被害を受けた。一応、修理はしたが、五年、六年に高潮と台風の影響を受け、宝永七年八月には、台風と高潮のために潰滅的な被害を受けた。詳細は、「新田開発」の項参照。

(3) 嘉永七寛年(一八五四)の大地震

嘉永六年(一八五三)は、ペリーの浦賀来航の年であり、翌七年は、開港条約が結ばれ、攘夷論で世情騒然たる年であるとともに、大地震が頻発した年でもあった。

この年の五月二〇日と六月一五日に近畿地方を中心に大地震があり、一月五日に「寅歳の大地震」と呼ばれた大地震が発生した。この地震は、四日にやや強い地震がおき、翌五日は、伊予にとって未曾有の大地震に襲われた。嘉永七年二月二七日に安政と改元されたが、余震は安政

二年の二月まで約三か月間続いた。当時の状況は次の資料によつてうかがうことができる。

ア 御神用並公私向之日記

(高鴨神社 神主 鴨 重忠)

一月四日五ツ時、地震しばらくゆる。五日七ツ時、大地震ゆる。夜も五度ゆる。小松町の恵美須宮、鳥居倒れ、玉之江村南、春宮の鳥居もなびく。六日も終日ゆる。夜もゆる。七日少しゆる。一度は大分ゆる。八日もゆる。藩より当社に於いて二夜三日御祈禱仰付らる。九日も昼夜。一〇日も少しゆる。一一日夜もゆる。一二日もゆる。一三日夜。一四、一五、一六日夜。一六日大風、大雪。一七日大雪、此度地震には、御上(藩主)を始め、御家中、在町も残らず小屋住居なり。一七日の夜。一八日の八ツ時。一九日夜。二〇日夜。二一日夜。二二日夜。此度の大地震当夜、二間床かまち落ち、かき落し候也。門の西脇、長屋沓間半に四間半倒れ候也。二三日夜。二四日夜。二五日夜。二六日夜ゆる。大雪。二九日「地震之儀決而咄ニ不ニ相成候。」と御上より御触有之候也。一二月一日夜数度。五日夜少し。六日同上。七日同上。八日同上。九日朝少し、一〇日九ツ時大ゆり、夜二度ゆる。

去る四日より今日迄、三六昼夜地震ゆる候。誠に恐しき事に候、一日今日はゆらず候。大方相治り候也。一二日夜五、六度ゆる。一三日五、六度ゆる。一四日夜強く長く地震ゆる。一七日夜二度ゆる。二〇日夜ゆる。二一日、二二日夜ゆる。二三、二四日夜ゆる。二五日門松立、当日より年号相改、安政元年と被仰出候。三〇日、先日より日々、夜ゆる。当日朝五ツ時大分強くゆる。翌年正月も大朔日より二〇日迄日々夜々地震ゆる也。

以上は、高鴨神社神主の個人的な記録であつて、視野が限定されてはいるが、大地震発生から約三か月間の大地震と余震の強弱や時刻を知ることができるとともに、厳寒期の雪の降る中で、藩邸の者を始め、御家中、在町の者が小屋住いをしていたことや、大地震という凶事から嘉永を安政と改元したことなどがわかつて興味深い。

イ 嘉永七年大地震発生から一ヶ月間の状況

(『会所日記』から抽出して作成)

嘉永七年の大地震は、表66をみると、五日と七日が中心であつて、その他は、余震であつたと考えられ、発生から五日間ぐらひは大騒動で、在町の人々は、ほとんど家業に

表66 嘉永七年大地震発生から一ヶ月間の状況

日	大 騷 動	鎮 静 向 向
(二月) 五日	<p>▲大地震と地鳴(午後四時頃) ▲強震(午後七時頃) ▲少々強震(午後九時と十二時頃)</p> <p>○ 古今例のない大地震で、武家屋敷、家中の上下の者、町家とも戸外に飛出して大騒動になる。○ 火災を消し止める。</p> <p>○ 於鶴様、孟宗竹藪に避難し、仮小屋を作る。○ 夜間の見廻りを始める。</p> <p>○ 村々から被害届出始める。○ 家中、家来以外の坂下門の出入禁止</p> <p>○ 破損のため藩校五日間休講</p> <p>○ 防火・盗難防止のため徒士目付は火事装束で昼夜見廻りを始める。後に足軽、主水が夜間見廻りに加わる</p>	
六日	<p>▲朝から少々宛地震 ▲頗る地震(午前十時三十分頃) ▲少々強震(午後二時頃)</p> <p>○ 一〇日 両社、宝寿寺、横峰寺での二夜三日の御祈禱結願で代官参詣。</p> <p>○ 一日 町方商売を始める。煮焚の商売を許可する。</p> <p>○ 二日 足軽の夜廻り中止 ○ 一三日 沖土手の修理始める。</p> <p>○ 水主の夜廻り中止 ○ 一七日 被害報告の集計(資料3-77参照)</p>	
七日		
八日		
二六日		
二七日		<p>○ 家を建替える 者に対して藩 から心付</p> <p>○ 流言禁止と所業精励のお触</p>
二九日		<p>○ 江戸村庄屋へ (大板五挺)</p> <p>○ 新屋敷村 四戸 北条新田 三戸 南川村 三戸</p> <p>○ 今在家村 二戸 周布村 一戸 半田村 一戸</p> <p>○ 北条村 六戸 吉田村 四戸</p> <p>鳥目一貫三〇〇文宛支給 (計26戸)</p>

『会所日記』から抽出した状況

手がつかなかったようである。

藩では、この非常事態に対応して、防火、盗難防止のための見廻りや被害の調査、社寺での御祈禱などいろいろ手を打った。一〇日目ごろから人心も落ち着きを取り戻して町方の商売が始まったり、沖土手の修理に取り掛かって藩でも一応、非常警戒体制を解いた。一七日には、領内の被害調査の集計(資料3-77)ができ、二七日には、それらの領民の中で建て替えの必要な半・全壊の家(納屋を除く)二六戸に対して、藩からの心付け(見舞)として、広江村庄屋に大板五挺(家の記録には、良材を賜ったとある)を始め、大板や鳥目を与えていて、ここにも小松藩伝統の仁政が見られる。なお二九日に「妄説ニ惑ひ、所々に寄り、所業を怠り或は無益の費等があるのは、甚だ不心得の事」と流言蜚語の禁止と家業精励のお触れを出しているのは、民心の動揺が鎮静化に向かったとは言え、毎日のような余震の連続では、領民の不安は大きく、寄るとさわると地震の話に夢中になって、仕事も手につかなかったことを物語っている。

資料3-77 嘉永七年大地震の藩内被害状況(二月一七)

○新屋敷村 (蔵・斗屋・庄屋・寺社の家屋破損)	二〇ヶ所
(道路・水田・堤防の地割 陥没と水の吹出し)	一ヶ所
○町	消 留
(家屋全・半壊)	一四戸
(家屋の破損)	三八戸
(子供の怪我)	少々
○今在家村 (家屋破損)	九ヶ所
(地割れによる潮の吹出し)	八ヶ所
○広江村 (庄屋等家屋の破損)	四ヶ所
(堤防・田地の地割れで水吹出し)	三ヶ所
○北条村 (家屋等の破損)	三四ヶ所
(屋敷内・道路の地割れで水・小砂 の吹出し)	一〇〇ヶ所
(堤防・用水樋等の破損)	九ヶ所
○周布村 (家屋等)	六ヶ所
○吉田村 (家屋・神社等破損)	五ヶ所
○半田村 (家屋)	一ヶ所
(地割れ水吹出し)	一ヶ所
○上嶋山村 (家屋)	五ヶ所
(堤防の破損)	一ヶ所

日集計)

一、藩邸など藩の建物 (大目付の調査)	
○御館 (庇、桁、鴨居、壁等の破損、土塀の倒壊)	二九か所
○会所、学問所 山荘、御作事細工場 (壁、土塀の倒壊) ……一四か所	
二、御家中 (廊内・下町)・寺院等 (御徒士目付の調査)	
○御家中 (門長屋・中門・納屋等の破損 土塀の倒壊)	三八戸
○寺院 (仏心寺・明勝寺・本善寺) (寺門・土塀)	三 寺
○牢屋 (土塀の倒壊)	一
三、在及び町の破損状況(庄屋からの報告)	
○大郷村	二ヶ所
○千足山村 (特になし)	
○大頭村 寺・道路の破損	二ヶ所
○妙口村 家屋・神社等の破損	五ヶ所
用水井手の破損	一五ヶ所
○南川村 家屋等破損	一ヶ所
道路・畑の地割れ	二ヶ所
○北川村 家屋等破損	六ヶ所

○大生院村
○萩生村 特になし

資料3-77 嘉永七年大地震の藩内被害状況からは、幸に子供の怪我が少々あった外は人畜の被害はなかった。しかし、建物その他の被害は相等甚大であって、地域別で言うると、新居郡内は比較的少なく、周布郡内で多かった。周布郡内では山間・山麓の地盤の固い村においては少なく、海岸部の地盤の弱い村においてひどかった。中でも北条村は、家屋の破損三四、堤防、用水樋等の破損箇所九、屋敷内や道筋の土地が亀裂して、水や小砂を吹き出す液状化現象のあった箇所が一〇〇もあって、地震のすさまじさを物語っている。

(二) 水 害

周布郡を貫流する中山川は、平素は沃野を潤して豊かな穀倉地帯を育んでいたが、長雨や大きな雨台風の時には、暴れ川となって、大きな被害を与えることも多かった。中でも右岸の小松側よりも、土地の低い左岸の方が堤防が決壊して被害を受けやすかった。特に川口に近い下通

表67 天明・天保の飢饉と難民救済等藩政の対応と展開

年度	災害		『永々誌日記覚帳』に見える今在家村の状況		藩政の展開		
	西暦	年号	難洪水	救済			
1779	安永8		(村人口350人)		・6代頼欽襲封 お引米	天明の大飢饉 竹鼻堅蔵の登用	
1781	天明1						
1782	2	大雨・洪水	55人	用捨米45石 1日1合	・被害を幕府に届ける ・竹鼻堅蔵奉行仮役になる		
1783	3	大洪水・大飢饉	7	大豆1.5合 (2/7~4/1)	諸入用の節減		
1784	4	凶作・飢饉			藩士給与の削減		
1785	5	旱魃・減収			お引米と儉約令		
1786	6	早雨・洪水		用捨米58石 御借米23石6斗	老中松平定信御米と儉約のお触を出す		
1787	7	小麦不作・大洪水	43	1日1合(2/17~4/30)	お引米		
1788	8	洪水・新田取替皆無	52	1日1合(2/13~5/1)	お引米半知半減半渡し		
1789	寛政1	旱魃・不能			藩札発行		
1790	2	旱魃・減収	116	下三村へ出生米3斗宛支給 用捨米30石一人に1.5升支給	江戸上屋敷類焼		
1792	4	大旱魃・大洪水			大騒見始まる		
1793	5	旱魃	27	五年賦の御借米35石	・在町触れ(儉約令) (芝居見物禁止、ひな祭、五月幟りの制限) ・学問所創設		
1794	6		48		近藤篤山招へい		
1795	7	旱魃	37		文化2年竹鼻堅蔵死去		
1796	8				文化9年農村触(儉約令)		
1797	9						
1798	10	稲枯死					
1799	11	大風雨					
1802	享和2						
1803	3						
1804	文化1	旱魃・洪水					
1807	文化4	暴風雨洪水					
1809	6	大旱魃洪水					
1820	文政3	洪水					
1827	文政10	飢饉					
1830	13	不作・飢饉					
1832	天保3	飢饉	(領内で) 3,050	藩から米支給215石 民間から米150石助	・儉約申合せ	天保の大飢饉	
1833	4	冷害・洪水・飢饉					・8年~12年お引米郡政改革
1834	5	洪水・飢饉					・米価高騰一升190文
1835	6	洪水・飢饉					・巡見使領内巡見
1836	7	長雨・大飢饉					・江戸上屋敷類焼
1837	8	流行病・飢饉					
1838	9	米価高騰・飢饉					
1839	10						
1840	11	赤痢流行					

などとあって、度々太兵衛新田の堤防決壊による被害があ

り筋の新屋敷村の角部・白坪あたりと今在家村、広江村などは、常習的な水害の場所であった。異常気象が続いて、慢性的な飢饉も続いていた天明・寛政ごろの被害状況の一端を今在家村庄屋の『永々誌日記覚帳』から抜粋すると、

● 天明六年午(一七八六)の九月六日大雨にて、七日朝五ツ時、太兵衛新田の前切れ、当村は水ぬまひ、「水ぬまい中痛み小見付」(臨時検見)の儀頼み、九月七日より同晦日迄御見分二・三度御出、五八石の御用捨仰付られ候。

● 天明八年申の七月二三日、夜の五ツ頃より大水に付、二四日九ツ時、小松御奉行所より廻り方見届けにお越、御代官より北条村東西へ、握り飯二五〇、吉田村へは、かゆ四斗を仰付けてお越、一人前二杯宛。但し近來の大水、新田惣無し、本田にて一三五石余之御取米。

● 寛政二年(一七九九)八月一日、一九日迄大暴風雨にて一九日四ツ時、宮の下太兵衛新田の東土手 切込ミ、水押込み下縄表底石迄ぬまい候得共、切場へ切り申さず大樋にて吐き、二一日の朝迄に荒水は吐き申候。右に付不作仕り、拝借願有之通り御貸し三〇石五年賦御貸し下され、村方無尺も取遣御引取候。

これに比べて、天明、天保の二大飢饉の特色は、東北地

ったことがわかる。これを防ぐために、天保八年(一八三七)に広江村庄屋久米弥介は、氷見の大庄屋高橋政美と相図って、中山川左側川裾に北堤を築いた。

小松藩でも水害予防のために、毎年正月に役人が領内の河川堤防を巡視して、破損の憂のある箇所を選定し、かねて徴収してある「当上役代米」の費用で修繕普請を行い、万一洪水の場合は、村掛りの役人が現場に出張して手当ての指図をした。また平素から常習地の今在家・広江・北条新田の各村には、小舟などを常備させるとともに、非常の場合には、庄屋日記からの抜粋にもあるように最寄の村々から炊き出しをして、被害地に送るように命じてあった。

(三) 天明、天保の大飢饉

別項でも述べた享保の大飢饉は、我が伊予国を中心とする関西一円の飢饉であって、一七年春の麦の不作に、五月からの長雨の中で、異常発生した「ウンカ」が稲を全滅させたことがかきになったのが原因であった。しかし幸いにも一年限りの一過性で終わった。

方を中心とした東日本一円の大飢饉であって、夏でも拾や綿入れが必要であったほど冷涼多雨の異常気象で、稲の生育不良が原因であった。

(1) 天明の大飢饉

天明三、五、六年分の『会所日記』が欠けているので、天明大飢饉当時の藩内の全貌はつかみかねるが、『永々誌日記覚帳』によって、人口約三五〇人の今在家村一村に限定はされるけれども、当時の状況の一端をうかがうことができる。表67はその概略をまとめたものである。

表68 天保の飢饉の領内難済者数と極めて難済者に対するお救米の支給

村名	難済者人数	お救米	
		米(石)	麦(石)
大郷村	一八〇人	二四四石	三三石
妙口村	二四〇人	二四四石	三三石
北川村	二四〇人	二四四石	三三石
南川村	二四〇人	二四四石	三三石
新屋敷村	五〇〇人	二四四石	三三石
千足村	七〇〇人	二四四石	三三石
今在家村	六二〇人	二四四石	三三石
広江村	五六〇人	二四四石	三三石

村名	難済者人数	お救米	
		米(石)	麦(石)
北条村西	一〇三三人	一五石	一五石
周布村	二〇六三人	一五石	一五石
吉田村	三〇三三人	一五石	一五石
下嶋山村	二〇三三人	一五石	一五石
半田村	一四三三人	一五石	一五石
大生院村	六四三三人	一五石	一五石
萩生村	五九〇人	一五石	一五石
計	三〇五〇人	八〇・五石	八一・五石

余りも異常気象が続き、それに伴って不作や凶作が連続している。その間、村民は、用捨米を受けたり、借米をしたり、極めて難済の者は、藩から一日一合の御助米を受けて凌いでいることがわかる。

(2) 天保の大飢饉

天保の初年がら、冷害と洪水の連続する異常気象で、慢性的な飢饉が続いていた。天保七年は、長雨、豪雨が続き大凶作となり、極めて難済な者が三〇五〇人に達する大飢饉となつて、藩では次のような処置をとつた。

ア 藩内難済者の調査

イ 麦作奨励のために「肥代米」を支給した。

十一月一日に、麦作が充分にできない村の役人を白洲に呼び出して、難済のため麦作の手当が行届きかねるらしいから「肥代米」を新屋敷村に一二九石九二九合、今在家村に一八石、広江村に二五石、北条村に五五石、大郷村に九石支給するから精を出すようにと達した。

ウ 領内の難済人へお救米一六二石を支給

十一月四日、村役人を白洲へ呼び、奉行から、極めて難済者に対するお救米を表68のように支給することを申し渡した。

なお「天保九年御巡見使様小松領御案内手控」には、「難済人へ御上より下され候米麦メ二一五石」とあるからこの後に五三石の追加があったものと推定される。

エ 領民有志も助勢米を差出す

二月二日、近藤保介から「困窮者が大変多いので、領内の有志も助勢米(施米)を差し出しては」との発案があつて、上役の承認と有志の者の賛同を得て、助勢米は一五〇石集まった。藩からのお救米にこの助勢米を加えて極めて困窮者へ一日一合あてを支給して、麦の実るまでをしの

ぐことにした。

オ 疫病対策に配慮をする。

(次の四の疫病禍のところで述べることにする。)

四 疫病禍

(1) 飢饉と疫病

凶作や飢饉の時の疫病には、神仏への祈禱に頼ることが多かったが、為政者は、過去の経験から飢饉になると栄養不良、抵抗力の低下によって、疫病に罹りやすいことを知っていた。

小松藩は、天明三年の大飢饉の翌年五月に各村の庄屋に對して、「疫病流行時御薬方御触」を出して、村民に周知徹底をさせた。

この御触は、大飢饉であつた享保一八年三月に、幕命によって医師望月三龔と丹羽正伯が、凶年の時、辺土の者が雑食して中毒が多く、また飢饉の後には必ず疫病が流行するので、これを防ぐためにいろいろな医書から、簡便な処方箋一二ヶ条を「時疫流行之節此薬を用いてその煩をのがるべし」と言う標題の下に書いたものである。

参考までにその中から次の三項目をあげておく。